

22 12 12

広がる 赤ちゃん 登校日

核家族化、少子化が進み、赤ちゃんと接する機会が少なくなった子どもたちが乳幼児と触れ合う取り組みが各地で行われている。中でも、継続的に同じ赤ちゃんとかかわりながら人間関係力をはぐくむことに力点を置いた「赤ちゃん登校日」という体験型授業が、鳥取県や石川県を中心に広がっている。

2度目の交流。赤ちゃんだけでなく児童も成長していることに気づかされる=10月、石川県内灘町立西荒屋小学校



男児を抱っこする授業の後、大切な命だから落とさないように頑張ったと話してくれた。9月、石川県内灘町立西荒屋小学校

何で泣いてるのかな？



「いないいないばあ。赤ちゃんがどうしたら喜んでくれるか、自ら考える。10月、石川県内灘町立西荒屋小学校



触れ合い学ぶ人間関係

何か赤ちゃんに突っついたらおつと積極的にあやす。「いないいないばあ」。どの児童もやさしいまなざしだった。

思いをくみ取る

人間関係が希薄になる中、「コミュニケーション」に苦

秋雨が冷たい10月の終わり。石川県内灘町立西荒屋小学校の赤ちゃん登校日が最終日を迎え、5年生15人が1カ月ぶりに「登校した。赤ちゃんとか向かい合った。」

事前に繰り返し基礎

「あいさつやり直し!」「よろしくお願ひします!」。いっそう大きな声が体育館に響く。「そう。あいさつは会えてうれいという気持ちの形にして相手に届けることよったね」。アドバイザーの鳥取大医学部准教授高塚人志さんが、これまで学んだことを振り返りながら授業を進める。100分間の授業で赤ちゃん

と触れ合うのは30分ほど。児童は事前に、相手の気持ちをみて聴くこと、自分の気持ちを形にして伝えることといったコミュニケーションの基礎を繰り返し学ぶ。それを実践する場が赤ちゃんとかかわりだ。

「何で泣いてるのかなあ。しっかり見て、あったかい気持ちで赤ちゃんに注いであげようね」。9月の登校日は、おそろおそろだった児童も、

手意識を持つ大人も多い。高塚さんが鳥取大の学生を対象にした調査(2008年)では、「他人とかかわるのが苦手」と回答した学生が45%、「あいさつや自己紹介が苦手」とも82%に上った。高塚さんは「人と向き合うトレーニング不足が原因」と指摘する。それを補うのが「赤ちゃん登校日」なのだという。

なぜ、赤ちゃんなのか。「赤ちゃんとは言葉のやりとりができないので、表情やしぐさから思いをくみ取り、自ら積極的に言葉を掛けるしかないからです」と高塚さん。赤ちゃんから批判的な言葉が向けられるはずもなく、児童は安心して心を開いていく。「1カ月ですごく大きくなって。歯が生えてきた。パートナーの赤ちゃんを抱き上げた児童は成長の速さを実感し、命の尊貴を知る。」「自分ももっやあって抱き締められていたんだ」と気づき、親やまわりの人への感謝が生まれ、自分の命が大切と考える。(高塚さん)

登校日は、赤ちゃんの親にとってもメリットがあるという。自分の子が子どもたちに愛され、役立っていること実感する。子育ての励みにつながるからだ。ある母親は「5年生になるとこんなふうにしっかりするんですね、11年後のわが子の姿を重ねてみた。高塚さんは言う。『この子たちが親になったとき、泣きやまない赤ちゃんに手をあげようか。きっと今日のまなざしに、わが子の気持ちをもくみ取ろうと真剣に向き合っています』」

「赤ちゃん登校日」は、鳥取大でヒューマン・コミュニケーションを教える高塚人志さんが考案したプログラム。抱っこやおむつ替えなどの赤ちゃんとの触れ合い体験のほか、「人と接するときのマナー学習」「赤ちゃんの親からわが子を思う気持ちや赤ちゃんのことをしっかりと聴く」「児童の親からの朗読」などを行う。プログラムの内容は高塚さんの著作「赤ちゃん力」(エイデル研究所)に詳しい。

メモ

「赤ちゃん登校日」は、鳥取大でヒューマン・コミュニケーションを教える高塚人志さんが考案したプログラム。抱っこやおむつ替えなどの赤ちゃんとの触れ合い体験のほか、「人と接するときのマナー学習」「赤ちゃんの親からわが子を思う気持ちや赤ちゃんのことをしっかりと聴く」「児童の親からの朗読」などを行う。プログラムの内容は高塚さんの著作「赤ちゃん力」(エイデル研究所)に詳しい。